



平成21年度
I P 演習報告

I P 演習の一例



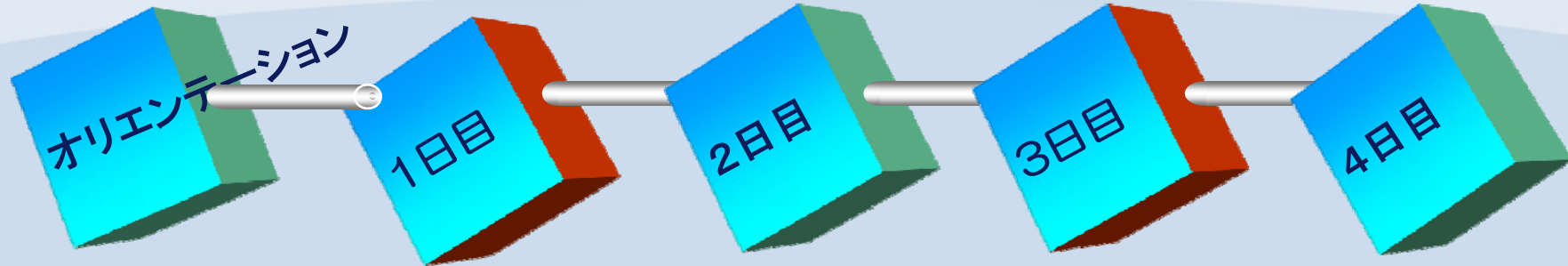
◆ Aチーム；看護2（1名は編入生）理学、社福、検査、医学1 6名の学生チーム

◆ A病院；約600床の地域の中核病院（救急医療センター、健診センター等）

◆ 事例；60代女性、脳出血後意識障害あり、ADL全介助、夫と息子と3人暮らし、自宅退院の方向という方の理解と支援の検討

◆ チームのルール；1日1回は発言しよう、挨拶と笑顔を忘れない、

Aチームの体験プロセス



チーム
づくり
事前学習
行動計画
作成

アイコラボに
よるやり取り

施設オリエ
ンテーション
インタビュー
内容検討
認定調査見学
家族・看護師に
インタビュー
ディスカッション

リフレクション

情報の整理
目標設定
退院カンファ
レンスに参加
分担して多
職種にインタ
ビュー、ディス
カッション

リフレクション

退院支援の
検討
台風に向けて
報告会の準備
施設内で報告
ディスカッション

リフレクション

台風18号の
ため待機
報告内容の
確認
報告会

リフレクション

Aチームの報告（IP演習の総括）

- ❖ 家族の考える治療のイメージと実際に行われる医療行為のギャップを感じた。
- ❖ 医療者間にもギャップが生じる。



これらの事実より…

❖ 現場に出た際は、多職種間のコミュニケーションをより綿密にとることが大事だと感じた！

- ❖ 自分の専門性の役割を再認識し、多職種の専門性に触れ、その守備範囲の理解を深めることができた。
- ❖ 職種にとらわれず、大局を見る目を養うことも必要である！

IP演習の協働による学習

目的；地域の保健医療福祉の場で、連携・協働を学ぶ

1

チーム
形成

2

多領域の
相互理解
自分の領域の
理解も含む

3

チームで取
り組む目標
とその内容
患者理解と課
題解決の検討

チーム形成

- ❖ 演習前から顔合わせをし、ITを活用したコミュニケーションをとっていたので、メンバーの性格や雰囲気はわかっていたので、演習中はそれぞれが意見を出し合い活発な話し合いができた。（理学）
- ❖ 各専門職の理解と各専門領域の枠を超えてチームを形成し患者に向き合う際の**協調性・コミュニケーション**の重要性を学んだ。（検査）
- ❖ メンバーが自分の守備範囲以外は他のメンバー任せになってしまう傾向があるように思えた。広い視野を持ち**全体を見渡して**メンバー間の**架け橋をする役割**が必要と感じた。（医学）

チーム形成

- ❖ **お互いを理解したいという気持ち**を持っていたことが重要であり、それがチームの中でできていたのだと感じる。(看護)
- ❖ 演習中は自分の考えや気持ちを率直に伝えることができなかった。メンバーがこっちの疑問を感じ取ってわからないことをすぐに説明してくれた。おかげで四苦八苦しながらも話しについていくことができた。自分の専門領域のことにメンバーが理解しようとする姿勢を示してくれた。そのことで**相手に対する関心**と、自分もその姿勢に応えるべく努力したいと**責任感**が芽生えた。相手を理解しようとする姿勢が**信頼関係**をつくりだし、**相乗効果を生み出す**ことを学んだ。(社福)

多領域の相互理解



- ❖ 看護学生は、入院時の医師の記述と看護記録を見るとき、現在からさかのぼって情報をみる。しかし、検査の学生は検査値を経時的にみて異常が出ていると、検査値から患者の様子を予測した。医学生は脳出血の病態に詳しくなかった。社会福祉の学生は医学の専門用語がわからない様子だったが家族の心理や社会的背景を読み取ろうとしていた。（看護）
- ❖ 多職種の領域の広さ・深さに驚いた。同じ患者の情報をみても着眼点が異なっている。（理学）
- ❖ 学科に関わらず患者のニーズを一番に尊重しようとする視点は同じであった。（社福）

多領域の相互理解



- ❖ 多職種間で共に作業し、コミュニケーションをとることで、自分の専門性の役割を再認識し、他職種の専門性の深さに驚き、守備範囲の理解を深めることができた（医学）
- ❖ 疾患、検査データ等の視点から患者を見すぎていて病気と闘っている患者の気持ちや望をくみ取れていないことに何度も気づかされた。今後の臨床場面で検体、データから見えてくる患者像、その支援なども視野にいれていくことで、**検査なりの連携ができるのではないかと思えた。**（検査）

患者理解と課題解決の検討



- ❖ 医療者側としては施設への転院が好ましいという状況であったが、退院調整カンファレンスに参加し、家族の意向を尊重して支援すること、病院だけでなく地域の機関との連携や社会資源の活用が重要と思った（看護）
- ❖ 病院スタッフのインタビューで、家族とスタッフ間、スタッフ同士にも認識のズレがあることに気づいた。
関係者の考え方や施設の方針など多岐にわたって理解を深めないといけないと患者さんやご家族の退院後の幸せな生活に結びつかないと思った（検査）

患者理解と課題解決の検討



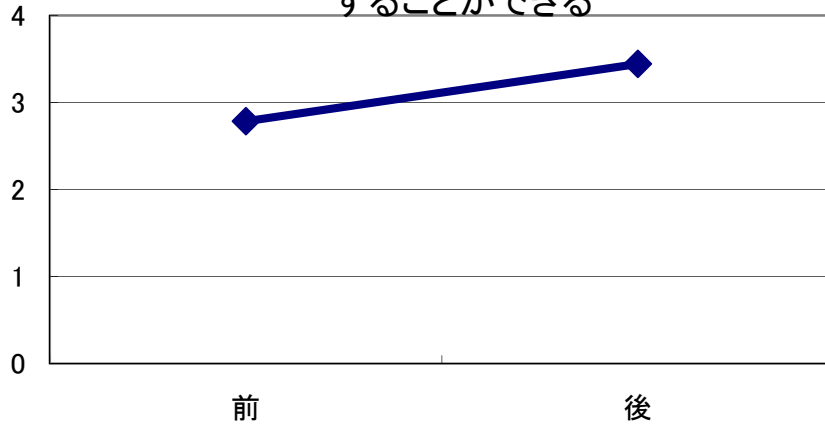
- ❖ 「家族の介護と日常生活の両立」という目標を設定することができ、それはご家族やスタッフと共有することができた。患者の視点にたって患者の理解を共有することは、その後のチーム活動において何か行き詰ったときに、根本に立ち返るために必ずおこなわなければならないことだと思った（社福）
- ❖ 患者について捉える視点の違いはチームの強み、これによってチームの考えの幅が広がるのだと思う（理学）

学生アンケートの結果

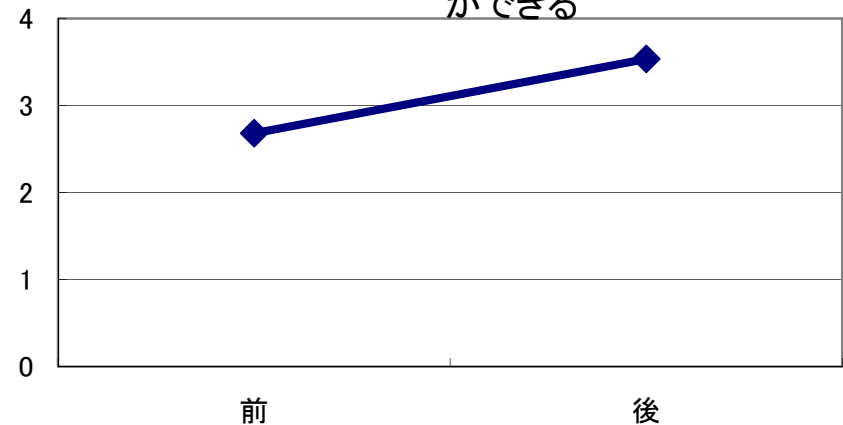


事前アンケート回収率58%、事後アンケート回収率57%

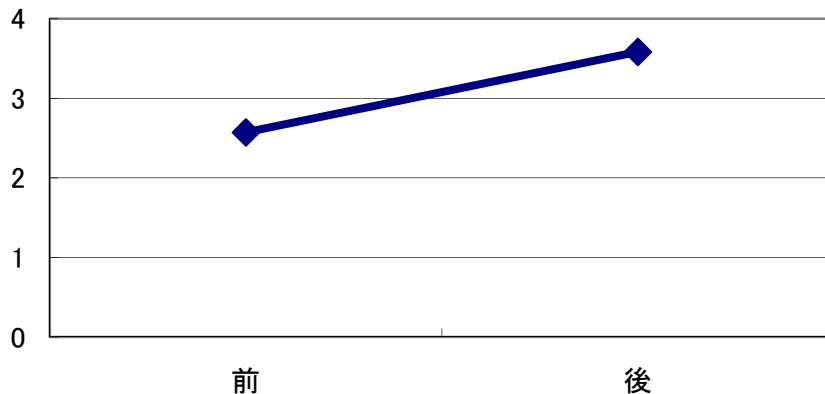
利用者の視点に立って利用者の支援を共有
することができる



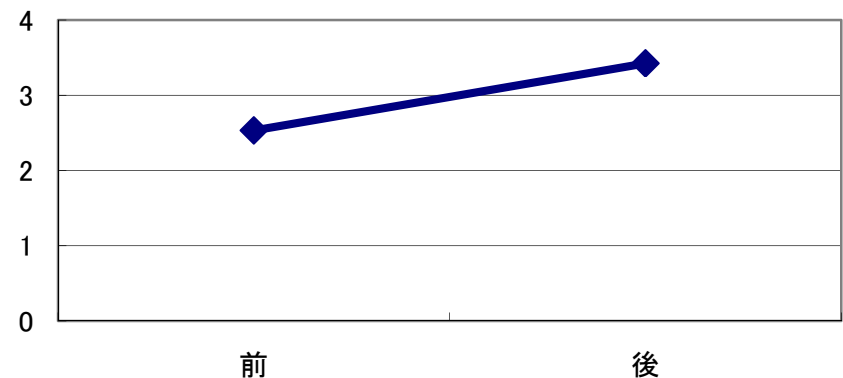
利用者中心の共通の支援目標を立てることが
できる



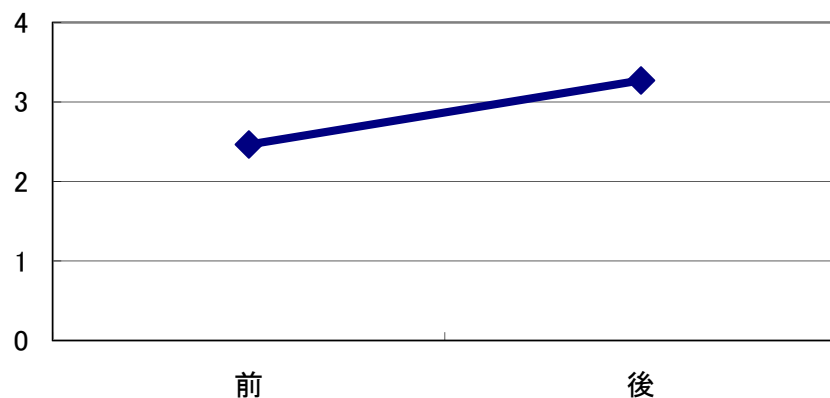
利用者の思い、ニーズ、願い、ゴール、ホー
プなどを討議することができる



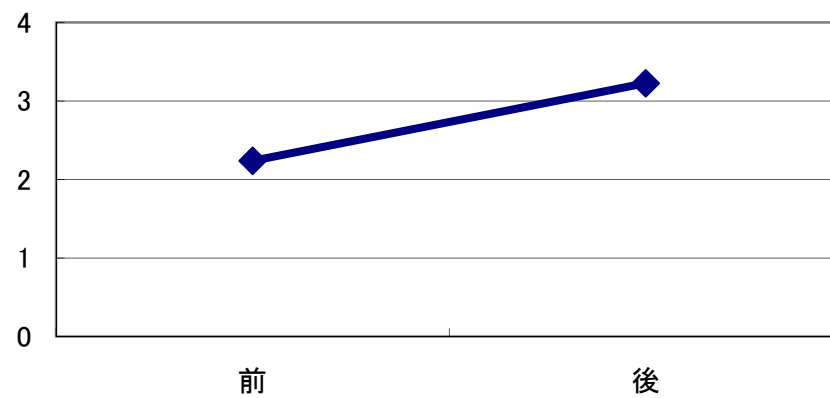
利用者に応じた目標を設定するために、利用者の
置かれている状況をアセスメントすることができる



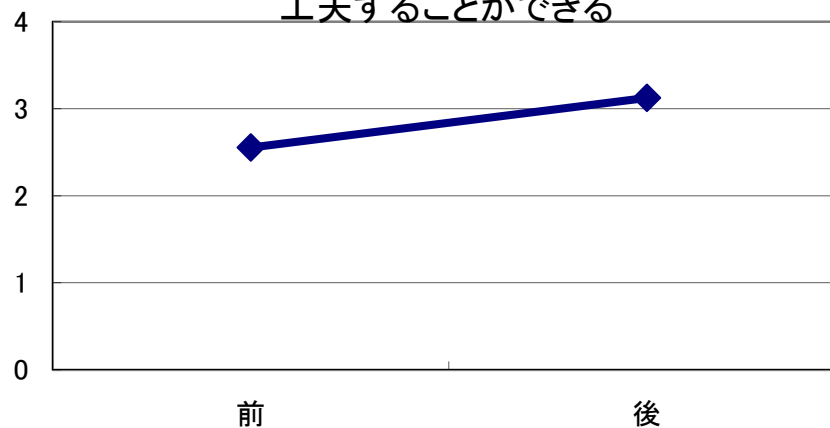
演習を通して学んだ自身の専門領域の特性
を具体的に述べることができる



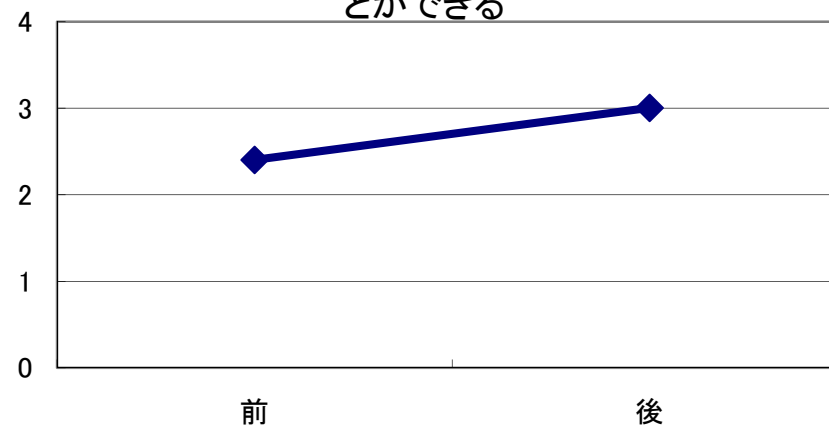
演習を通して学んだお互いの専門領域の共
通性を具体的に述べることができる



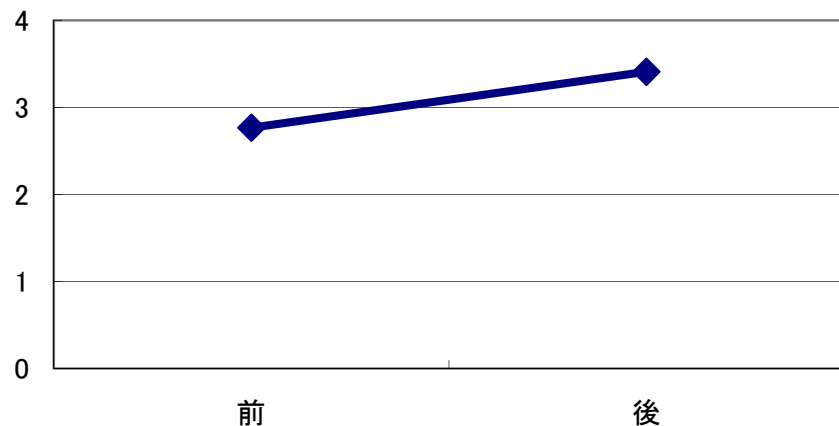
自分の考えをメンバーに伝わりやすいように
工夫することができる



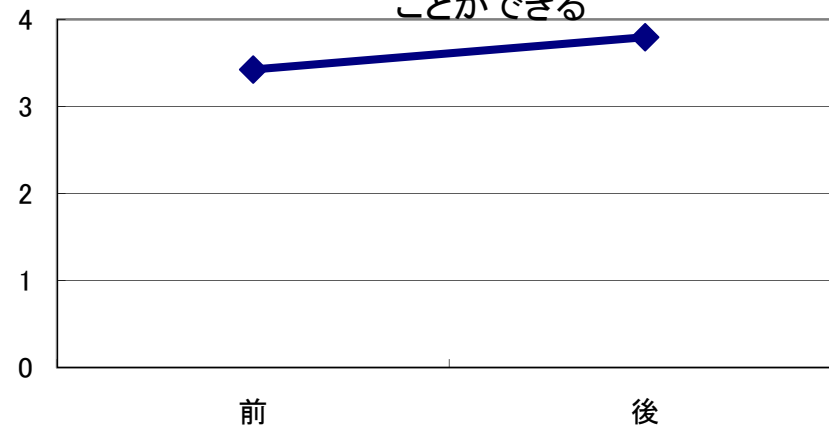
自分の考えを簡明かつ論理的に説明するこ
とができる



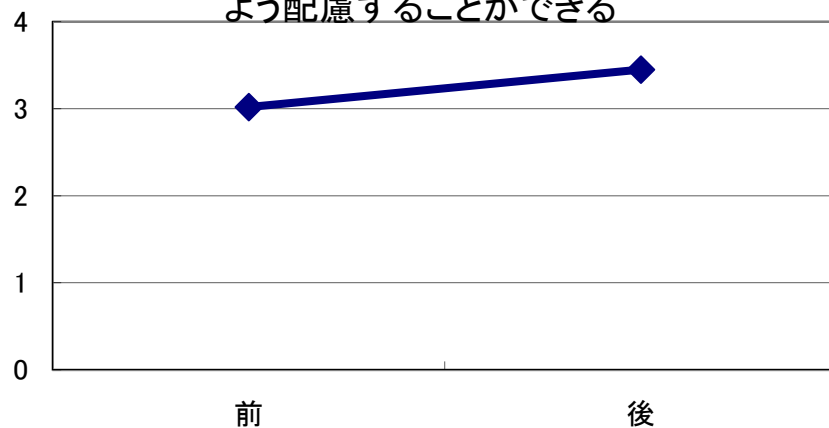
パートナーシップを発揮することができる



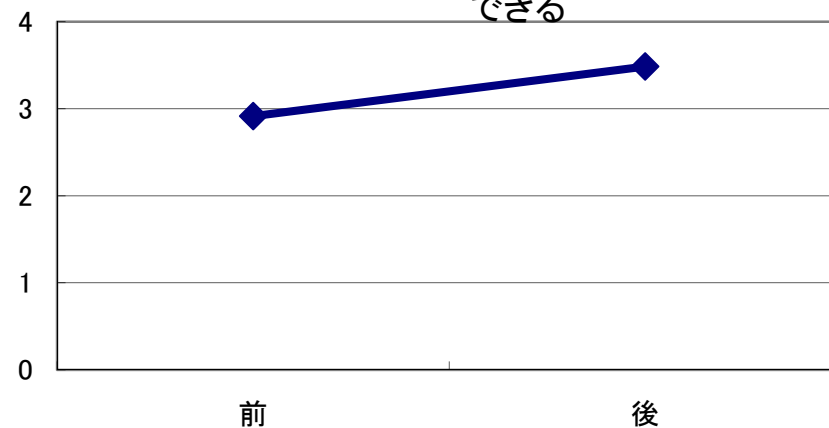
チームメンバーの考えを理解しようと努めることができる

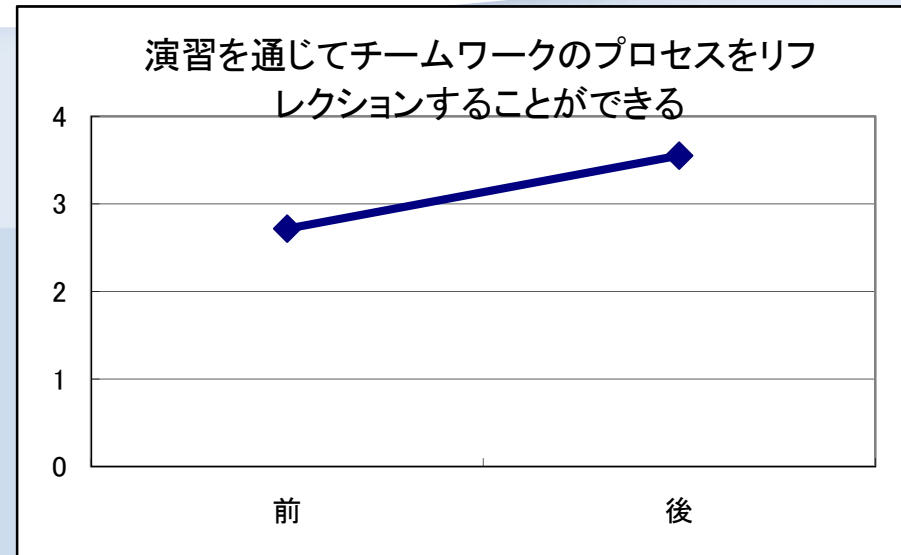
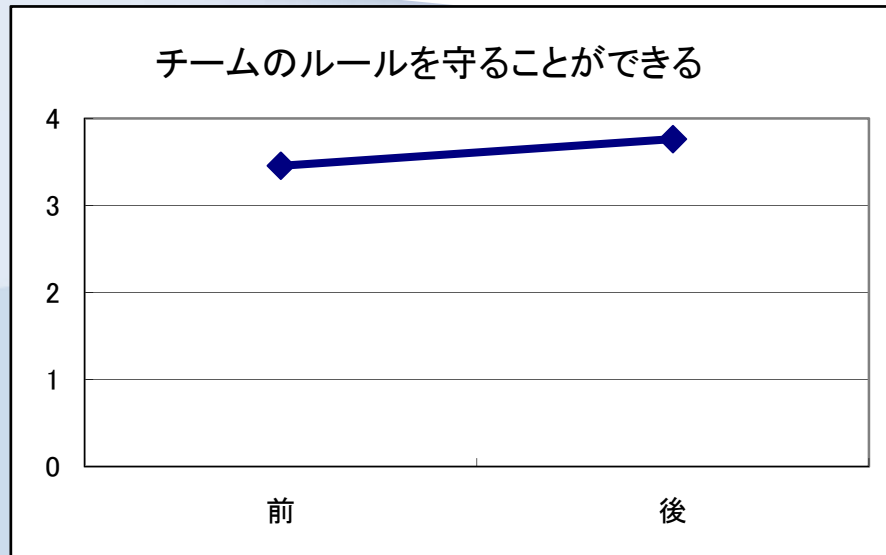


個々のメンバーが自分の考えを伝えられるよう配慮することができる



ディスカッションに積極的に参加することができる





- *とても頭を使って疲れましたが、熱いディスカッションができ、メンバーがプロセスを通じて1つのチームになれたという実感と、これから社会に出る上で忘れたくない、いくつもの気付きを得られました。毎日あっという間で時間が足りない！！という状況でしたが、たくさんの学びが凝縮された、とても濃い時間でした。
- *それぞれの領域が、専門性を出し合ってチーム形成のプロセスを感じながらディスカッションすることはできたと思います。IP演習を4年生に行うというのは、各々の専門的知識が深まってきている時期なので、良かったと思います。
- *よくわからない演習でした。結局、何を議論させたかったんですか？ケアマネージャーのように、ケアプランを立てるということでよかったのでしょうか？
- *期間が短くもったいない。*期間が短くまとめるのが大変。

学生レポートに共通する特徴の例1

チーム丸

- ❖ 自分も**チームの一員**であるという認識が持てるようになった。チームでつくることの大切さや、広い視野や違う視点から考えられる**チームだからこそその支援**があると、学ぶことができた。
- ❖ 自分だけでは達成できないが、メンバーの力を合わせることで利用者さんを包括的に支援することができるようになった。それはメンバーの**利用者への思いが共通**であったからだと思う。
- ❖ 連携とは、他職種の仕事の場を見たり、情報を把握しあうことではなく、チームとしての**目標や方向性を見出し、それに向かって話し合うこと、能動的に相手の視点や考え方を取り入れる姿勢**の積み重ねのことを言うのではないかと思った。それを体感することができた。
- ❖ **目標が明確になると、チームが一丸となり**大きな力を発揮することができた。目標ができたことで課題の興味も深まり、より積極的な意見が交わされるようになった。それぞれの**人間性をうかがい知ることができ、お互いに尊重しあうことができるチームに成長**できたと感じる。

学生レポートに共通する特徴の例 2

利用者・
患者の
存在

信頼

個と
組織

地域

- ❖ 今回の患者様とのかかわりでは医療を提供するものとしての思いと、一人の人間としての思いの葛藤を感じることができた。この葛藤は他の場所では体験できない貴重な体験であった。
- ❖ 全員が共通の目標を語ったことが印象的だった、目指すところは患者とご主人の幸せであった。
- ❖ 最終的に目指すところは、自分たちでチームを形成し、**信頼関係**を築くことの重要性について学ぶことができた。
- ❖ 専門職へのインタビューで一番多く聞かれたのが「**信頼**」という言葉だった。
- ❖ 個々の専門職同士の連携には、**組織と組織の繋が**りがあり、それを基盤とした**個と個の他職種間の繋が**りが組織の繋がりを強くすることを学んだ。
- ❖ IP演習では、施設内の連携を考えるだけでなく地域の中でその施設がどのような位置付けであるのか、役割を担っているのかまで知ることができた。

看護学生のレポートの一例



新しい視点
広がり

患者理解
深まり

❖自分の専門性を引き出すのも勿論、他の分野にも興味関心を持ち、知識を備えておくことで、ディスカッションが活発化し、単一の専門家同士では**気づかなかった点に気づき、新しい視点から物事を捉えることができる**と思った。

❖今までの病院実習ではさまざまな視点から患者さんを捉えることができなかった。自分の考えや視点にとらわれて、**患者さんを偏った視点で捉えてしまい、全体像を把握するにも時間がかかっていた**。しかし、IP演習では、各学科それぞれの視点で患者さんを見てそれを持ち寄って共有し、全体像を把握したため、短い期間でも患者さんの全体像を把握し課題を見つけることができた。私は、**多職種の意見を取り入れることで視野が広がり、患者さんを多面的に見れるようになった**。

社会福祉の学生レポートの一例

連携の 実感

- ❖ 私達が4年間言われ続けてきた「連携」という言葉、聞いて理解していたが、このIP演習を通して、連携の本質を垣間見た気がする。
- ❖ 社会福祉学科の学生として、その立場からきちんと意見が言えるか不安だったが、不安よりも自分とは違う視点を知れることが面白いと思うようになった。「社会福祉だから」ではなく、自分ができることを判断し、誰だったらできるかと考え、「つないでいく」それが連携の一つの形なのではないかと思った。
- ❖ 学生だけの事例検討であれば、様々なパターンの答えを考えることで終結していいかもしれないが、IP演習では実際に利用者が目の前に居て、すぐに疑問を解決することが求められる。それが自分の専門的なことでなければ、専門の職種に聞き、情報交換することが「連携」であると思われる。
- ❖ 自己の領域の知識が浅いということを痛感した。

理学療法学生のレポートの一例

専門性の理解・広がり

- ❖ これまでの臨床実習から、ある程度自分の領域に対する知識・考え方を得ることができていた。今回はそれをチームのために活用できればと考えていた。しかし、自分が普段使っている専門用語が通じなかったり、うまく説明できず困惑することがあった。
- ❖ メンバーとの積極的なディスカッションで、患者のネガティブなところばかり見ている自分に気づいた。患者のよりよい生活のためを考えていく過程にはポジティブな面に目を向けていくことの大切さに気付いた。
- ❖ 支援をするために、それぞれの人間が持っている個性を持ち合わせて、協力して支援にあたるという人間として当たり前前の行為を、医療職という名に囚われて忘れていたことを改めて思い出すことができた貴重な4日間であった。

作業療法学生のレポートの一例

専門性の理解・広がり

- ❖ はじめ、専門性を意識することによって討論が滞ってしまった。IP演習＝連携と統合・・・つまり専門性をださなければ、という意識がかなりあったためである。「専門職として」ではなく、「個人の感覚」を大切にして話し合いを進めた。
- ❖ 私は、作業療法学科の人同士の話し合いでは発言できていたので、なぜ、初日は発言できなかったのかとても悔しかった。その時初めて、自分の専門性について考えるようになったと思う。おそらく「専門性」ということに固執してしまったのかもしれない。2日目には、自分たちの専門性に凝り固まっていて、他の人の意見が理解できず、全員の意見が対立していた。この意見交換によって他学科の学生と自分との着眼点に気づくことができた。
- ❖ IP演習で得たものの一番は、自分の専門性の理解だと感じる。それによってOTの魅力を改めて感じることができ、チームにどのような立場で参加すればよいかわかったような気がする。
- ❖ 専門性だけにとらわれず、一人の人間として患者のことを考えてアプローチ方法を考えていくことの大切さに気付いた。

検査技術の学生のレポートの一例

人としてみる

- ❖ 検査ではどうしても忘れがちな「患者＝人」という医療の基本的な部分を再認識でき、これからの意識に変化が生まれそうである。
- ❖ 検査分野の狭い分野にしかいない、ということに気づいた。この演習は新しい視点を切り開く機会を与えてくれるものであった。
- ❖ 実際に患者さんに接することで、患者さんの人柄や人生などが見え、**患者さんを生体データだけではなく、1人の人間としてとらえる**ことができた。今までも、患者さんのために検査を行うという理念は持っていたものの、患者さんを生身の人間として捉えることで更に覇気が生まれ、検査技師の能力を磨く糧になると感じた。
- ❖ **コミュニケーションの能力**、またそのための時間を確保する力を身に着けることも大切であると考える。

口腔保健の学生レポートから



広がり・連携の必要性

- ❖ 今までの実習では、自らの専門性を体得することに必死で、学習させてもらっている環境にまで目を向けるに至らなかった。今回は、利用者を中心に考えるという視点、多職種連携の必要性がいかなるものかを感じ取ることができた。
- ❖ 未知の領域で、知識を持っている他学科の学生に引け目も感じていたが、歯科・口腔の観点からも、あるいは、医療に関係ない一般的な視点から見て、広く情報収集し、感じた疑問を皆に伝える役目をした。たくさんの議論を交わしてチームとしても自分としても目標も達成できた。

健康行動の学生レポートから

学科・専攻の特性

- ❖ 自分は「専門的な先入観のない意見」として共有してもらえていることに気付いた。
- ❖ 何よりも大切なことは、どのような場面でもまず一人の人間として、個々の感覚を忘れないということだった。
- ❖ 健康行動科学の視点から、発表の媒体作り（パワーポイント）で、「情報を扱う」という授業で学んだ「情報を扱いそれをわかりやすく相手にプレゼンテーションするという分野で自分の専門性を発揮することができた。
- ❖ 健康開発学科とは何かとずっと考えてきた。「周りの人達を客観視して感想を述べる」くらいしかできななかったが、私が学んできたことから、これが専門性なのかもしれないと思った。

IP演習に対する施設からの意見



- ❖ 「自分の意見が言える」「他者の意見を聞ける」専門職になってほしい。
- ❖ 真の連携を理解した人材を地域に継続的に輩出してほしい。専門職の連携が障害者、家族の生活を変え、地域社会を変え、制度を変えることにつながる。
- ❖ すべての医療福祉系の大学でIP演習を取り入れたら、現場の連携・協働はもっとよくなると思う。

- ❖ IP演習を通して、自分たちの連携・協働を見直す機会になった。
- ❖ 現場ではともすると自分の専門職としての立場を主張し、他職種との対立が生まれてしまうことがある。私達は専門職としての知識を高めていくことも当然大切だが、一人の幸せを考えて、多職種と手をつないで協働できる力を養う必要があると思う。